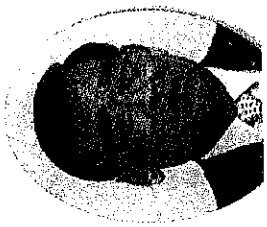
会報
第33号
2023年7月発行
発行者　日本陸上倶楽部
笠原　章平

日本陸上倶楽部

会長挨拶

会長　笠原　章平



会員寄稿

走幅跳選手としての16年間

岡野　進

中学から高1までは、走高跳が専門だった。中3(1962)で1m76(全国3位)、高1の全国高校(新潟)では、予選と決勝で1m78を跳んだ。しかし、高2になって走力が増し、自然に走幅跳に転向した。高3(1965)の4月には、6m99を跳んだ。夏の全国高校(大分)の予選では6m92を跳び、全体2番目の記録で決勝に進んだが、強い向い風の中、足が踏切板に乗らず不本意な記録に終った。10月の岐阜国体では6m84を跳んで、何とか6位入賞を果たした。

東京教育大2年(1967)の秋季記録会で、一気に7m43(日本ランク5傑)と記録を伸ばした。11月の第1回織田記念でも、7m36を跳んで4位となった。翌1968年6月の第37回日本学生(瑞穂)は、生憎の土砂降り、土の助走路は水浸しで軟弱、その中で1回目に7m20を跳んで優勝した。2位は順大の出口選手、3位は日大の川越選手だった。この試合以降、「1回目は絶対にファールせず、7m20以上を跳ぶこと!」を心掛けた。

1970年4月、都立小山台高校に赴任。しばらく記録は停滞したが、1974年、「素早く3歩駆け上がる踏切りからのダブル・シザース」を完成させた6月の日本選手権では、7m46で6位に、また2週間後の実業団対学生では、7m49を跳んで優勝した。

翌1975年の第59回日本選手権では7m46で2位、藤原選手に1cm差で敗れた。8月の東京都国体予選では、土の助走路で7m50を跳んだが、期待された三重国体は、7m36(4位)に終わった。なお、この三重国体では400mリレー(第3走者)で、鹿児島国体に次いで2回目の優勝を飾った。

山梨県立女子短大に移った1976～1979年に出場した日本選手権、全日本実業団、実業団対学生では3～6位に入賞し、また東京選手権と東日本実業団では、それぞれ優勝と2位が2回ずつだった。その中で、1978年の第41回東京選手権では7m54を跳んだ。翌1979年のスポニチ全日本選抜では、7m55の自己最高で2位。優勝は町田選手で、臼井選手が3位だった。この結果、町田選手と私が日中対抗陸上(北京)の代表に選ばれた。

第59回日本陸上選抜選手権大会

北京では7m36で3位、これが私の最後の試合となった。

〈1974.3 日本跳〉